

人工肛門閉鎖術における 手術部位感染症の検討

たに 谷 浦 隆 仁 ひゃく ども りょう じ
た 田 しま 島 よし 義 つぐ 証

キーワード：人工肛門閉鎖術，手術部位感染症，感染予防

要 旨

緒言：人工肛門閉鎖術は術後合併症の頻度が高く，その多くが手術部位感染症（以下，SSI）である。今回，自験例を対象に人工肛門閉鎖術後の SSI の発生に関する検討を行い，SSI のリスク因子と予防法を考察した。

方法・対象：2008年4月から2012年6月までに人工肛門閉鎖術を実施した32例を対象に臨床背景，手術因子と SSI との関連を検討した。

結果：SSI は32例中11例（34.4%）に発生し，その内，表層部 SSI が8例を占めていた。統計学的に，結腸ストマ閉鎖例は回腸ストマ閉鎖例に比べて有意に SSI 発生率が高かった（52.6% vs. 7.7%， $p < 0.01$ ）。その他の因子と SSI の関連性はみいだせなかった。

結論：結腸ストマ閉鎖術後は表層部 SSI が多くみられ，注意を要する。今後も術式や創管理の工夫が必要である。

緒 言

一時的人工肛門は大腸穿孔や腸閉塞，大腸切除術後の縫合不全やその予防目的などで造設される。近年，肛門機能温存を目指した直腸癌に対する術前放射線化学療法や超低位前方切除術，内肛門括約筋切除術などが普及してきているが，その際に，縫合不全のリスクを考慮して一時的人工肛門を造

設することが多い。従って，人工肛門閉鎖術を要する症例は今後も増加すると考えられる。人工肛門閉鎖術は，患者 QOL の改善と排便機能の回復を目的として行われる比較的低侵襲の手術であるが，術後合併症が高率に発生し，特に手術部位感染症 Surgical site infection（以下，SSI）の頻度は15~40%と報告されている¹⁻⁴⁾。表層部 SSI は致命的になることは少ないものの，患者の社会復帰を遅らせ，患者 QOL の低下，整容面の問題，医療費の高騰，腹壁瘢痕ヘルニア等の原因となるなど，様々な問題を誘発する。これまで人工肛門

Takahito TANIURA et al.

島根大学医学部附属病院消化器・総合外科

連絡先：〒693-8501 出雲市塩冶町89-1

島根大学医学部附属病院消化器・総合外科